

蛙のゴム靴

宮沢賢治

青空文庫

まつ 松の木や、なら 檜の木の下を、深い せき 堰が流れて居りました。岸には、いばら 茨やつゆ草やただが、一杯に しげい しげり、そのつゆくさの十本ばかり集った下のあたりに、カン蛙の がかえる うちがありました。

それから、林の中の檜の木の下にブン蛙のうちはありました。

林の向うのすすきのかげには、ベン蛙のうちはありました。

びき 三足は年も同じなら大きさも大てい同じ、どれも負けず かつ おと 劣らず生意気で、いたずらものでした。

ある夏の暮れ方、カン蛙ブン蛙ベン蛙の三足は、カン蛙の家の前のつめくさの広場 かに すわ につて、雲見ということをやつて居りました。一体蛙どもは、みんな、夏の雲の ね 峯を見ることが大すきです。じつさいあのまつしろなプクプクした、玉 ぎよくずい 髓のような、玉あられのような、またたんぱく せき 又蛋白石を刻んでこさえた葡萄 ぶどう の置物のような雲の峯は、誰の目にも立派に見えますが、蛙どもには殊にそれが見事なのです。眺めても眺めても かな 厭きないのです。そのわけは、雲のみねというものは、どこか蛙の頭の形に肖て かに いますし、それから春の蛙の卵に似ています。それで日本人ならば、ちょうど花見とか月見とか言う ところ 処を、蛙どもは雲見

をやります。

「どうも実に立派だね。だんだんペネタ形になるね。」

「うん。うすい金色だね。永遠の生命を思わせるね。」

「実に僕^{ぼく}たちの理想だね。」

雲のみねはだんだんペネタ形になって参りました。ペネタ形というのは、蛙どもでは大へん高^{こう}尚^{しょう}なものになっています。平たいことなのです。雲の峰^{みね}はだんだん崩^{くず}れてあたりはよほどすくろくなりました。

「この頃^{ごろ}、ヘロンの方ではゴム靴^{ぐもくつ}がはやるね。」ヘロンというのは蛙語です。人間ということです。

「うん。よくみんなはいてるようだね。」

「僕^{ぼく}たちもほしいもんだな。」

「全くほしいよ。あいつをはいてなら栗^{くり}のいがでも何でもこわくないぜ。」

「ほしいもんだなあ。」

「手に入れる工夫^{くふう}はないだろうか。」

「ないわけでもないだろう。ただ僕^{ぼく}たちののはヘロンのとは大きさも型も大分ちがうから拵^{こしら}

え直さないと駄目^{だめ}だな。」

「うん。それはそうさ。」

さて雲のみねは全くくずれ、あたりは藍色^{あいいろ}になりました。そこでベン蛙とブン蛙とは、「さよならね。」と云^いってカン蛙とわかれ、林の下の堰を勇ましく泳いで自分のうちに帰って行きました。

*

あとでカン蛙は腕^{うで}を組んで考えました。桔梗色^{きぎょういろ}の夕暗^{ゆうやみ}の中です。

しばらくしばらくたつてからやつと「ギツギツ」と二声ばかり鳴きました。そして草原をぺたぺた歩いて畑にやつて参りました、

それから声をうんと細くして、

「野鼠^{のねずみ}さん、野鼠さん。もうし、もうし。」と呼びました。

「ツン。」と野鼠は返事をして、ひよこりと蛙の前に出て来ました。そのうすぐろい顔も、もう見えないくらい暗いのです。

「野鼠さん。今晚は。一つお前さんに頼みがあるんだが、きいて呉れないかね。」

「いや、それはきいてあげよう。去年の秋、僕が蕎麦団子を食べて、チブスになって、ひどいわずらいをしたときに、あれほど親身の介抱を受けながら、その恩を何でわすれてしまうもんかね。」

「そうか。そんなら一つお前さん、ゴム靴を一足工夫して呉れないか。形はどうでもいいんだよ。僕がこしらえ直すから。」

「ああ、いいとも。明日の晩までにはきつと持つて来てあげよう。」

「そうか。それはどうもありがとう。ではお願いするよ。さよならね。」

カン蛙は大よろこびで自分のうちへ帰つて寝てしまいました。

*

次の晩方です。

カン蛙は又畑に来て、

「野鼠さん。野鼠さん。もうし。もうし。」とやさしい声で呼びました。

野鼠はいかにも疲れたらしく、目をとろんとして、はああとため息をついて、それに何だか大へん憤^{おこ}つて出て来ましたが、いきなり小さなゴム靴をカン蛙の前に投げ出しました。「そら、カン蛙さん。取つてお呉れ。ひどい難儀^{なんぎ}をしたよ。大へんな手数をしたよ。命がけで心配したよ。僕はお前のご恩はこれで払^{はら}つたよ。少し払い過ぎた位かしらん。」と云いながら、野鼠はぷいぷい行つてしまつたのでした。

カン蛙は、野鼠の激昂^{げつこう}のあんまりひどいの、しばらくは呆^{あき}れていましたが、なるほど考えて見ると、それも無理はありませんでした。まず野鼠は、ただの鼠にゴム靴をたのむ、ただの鼠は猫^{ねこ}にたのむ、猫は犬にたのむ、犬は馬にたのむ、馬は自分の金^{かなぐつ}沓^{もら}を貰^{もら}うとき、なんとかかんとかがまかして、ゴム靴をもう一足受け取る、それから、馬がそれを犬に渡^{わた}す、犬が猫に渡す、猫がただの鼠に渡す、ただの鼠が野鼠に渡す、その渡しようにいづれあとでお礼をよこせとか何とか、気味の悪い語^{ことば}がついていたのでしょう、そのほか馬はあとでゴム靴をごまかしたことがわかったら、人間からよっぽどひどい目にあわされるのでしよう。それ全体を野鼠が心配して考えるのですから、とても命にさわるほどつらい訳です。けれどもカン蛙は、その立派なゴム靴を見ては、もう嬉^{うれ}しくて嬉しくて、口がむずむず云うのでした。

早速^{さつそく}それを叩^{たた}いたり引っぱったりして、丁度自分の足に合うようにこしらえ直し、にたにた笑いながら足にはめ、その晚一ばん中歩きまわり、暁^{あけがた}方^{かた}になってから、ぐったり疲れて自分の家に帰りました。そして睡^{ねむ}りました。

*

「カン君、カン君、もう雲見の時間だよ。おいおい。カン君。」カン蛙は眼^めをあけました。見るとブン蛙とベン蛙とがしきりに自分のからだをゆすぶっています。なるほど、東にはうすい黄^{きんいろ}金色の雲の峯が美しく聳^{そび}えています。

「や、君はもうゴム靴をはいてるね。どこから出したんだ。」

「いや、これはひどい難儀をして大へんな手数をしてそれから命がけほど頭を痛くして取って来たんだ。君たちにはとても持てまいよ。歩いて見せようか。そら、いい工^{ぐあ}合^{あい}だろう。僕^わがこいつをはいてすすつと歩いたらまるで芝^{しば}居^いのようだろう。まるでカーイのようだろう、イーのようだろう。」

「うん、実にいいね。僕たちもほしいよ。けれど仕方ないなあ。」

「仕方ないよ。」

雪の峯は銀色で、今が一番高い所です。けれどもベン蛙とブン蛙とは、雲なんかは見ないでゴム靴ばかり見ているのでした。

そのとき向うの方から、一足の美しいかえるの娘^{むすめ}がはねて来てつゆくさの向うからはずかしそうに顔を出しました。

「ルラさん、今晚は。何のご用ですか。」

「お父さんが、おむこさんを探して来いって。」娘の蛙は顔を少し平ったくしました。
「僕なんかはどうかなあ。」ベン蛙が云いました。

「あるいは僕なんかもいいかもしれないな。」ブン蛙が云いました。

ところがカン蛙は一言も物を云わずに、すすつとそこらを歩いていたばかりです。

「あら、あたしもうきめたわ。」

「誰^{たれ}にさ？」二足は眼をぱちぱちさせました。

カン蛙はまだすすつと歩いています。

「あの方だわ。」娘の蛙は左手で顔をかくして右手の指をひろげてカン蛙を指しました。

「おいカン君、お嬢^{じょう}さんがきみにきめたとき。」

「何をさ？」

カン蛙はけろんとした顔つきをしてこつちを向きました。

「お嬢さんがおまえさんを連れて行くとき。」

カン蛙は急いでこつちへ来ました。

「お嬢さん今晚は、僕に何か用があるんですか。なるほど、そうですね。よろしい。承知しました。それで日はいつにしましょう。式の日は。」

「八月二日がいいわ。」

「それがいいです。」カン蛙はすまして空を向きました。

そこでは雲の峯がいままたペネタ形になって流れています。

「そんならあたしうちへ帰ってみんなにそう云うわ。」

「ええ、」

「さよなら」

「さよならね。」

ベン蛙とブン蛙はぶりぶり怒って、いきなりくるりとうしろを向いて帰ってしまいました。しやくにさわったまぎれに、あの林の下の堰せきを、ただ二足にちえつちえつと泳いだの

でした。そのあとでカン蛙のよろこびようと云つたらもうとてもありません。あちこちあるいてあるいて、東から二十日の月が登るころやつとうちに帰つて寝ました。

*

さてルラ蛙の方でも、いろいろ仕度したくをしたりカン蛙と談判をしたり、だんだん事がまともりました。いよいよあさつてが結婚式という日の明方、カン蛙は夢ゆめの中で、

「今日は僕はどうしてもみんなの所を歩いて明後日あさつての式に招待して来ないといけないな。」と云いました。ところがその夜明方から朝にかけて、いよいよ雨が降りはじめました。林はガアガアと鳴り、カン蛙のうちの前のつめくさは、うす濁にごった水をかぶつてぼんやりとかすんで見えました。それでもカン蛙は勇んで家を出ました。せきの水は濁にごつて大へんに増し、幾いくほん本もの蓼たでやつゆくさは、すっかり水の中になりました。飛び込むこのは一寸ちよつとこわいくらいです。カン蛙は、けれども一本のたでから、ピチャンと水に飛び込んで、ツイツイツイ泳ぎました。泳ぎながらどんどん流されました。それでもとにかく向うの岸にのぼりました。

それから苔こけの上をずんずん通り、幾本もの虫のあるく道を横切って、大粒おおつぶの雨にうたれゴム靴をピチャピチャ云わせながら、櫓うしの木の下のブン蛙のおうちに来て高く叫びました。

「今日は、今日は。」

「どなたですか。ああ君か。はいり給え。たま」

「うん、どうもひどい雨だね。パッセン大街道だいかいどうも今日はいきものの影かげさえないぞ。」

「そうか。ずいぶんひどい雨だ。」

「ところで君も知ってる通り、明後日あさっては僕の結婚式なんだ。どうか来て呉れ給え。」

「うん。そうそう。そう云えばあの時あのちつぽけな赤い虫が何かそんなこと云ってたようだったね。行こう。」

「ありがとう。どうか頼むよ。それではさよならね。」

「さよならね。」

カン蛙は又ピチャピチャ林の中を通ってすすきの中のベン蛙のうちにやって参りました。

「今日は、今日は。」

「どなたですか。ああ君か。はいれ。」

「ありがとう。どうもひどい雨だ。パッセン大街道も今日はしんとしてるよ。」

「そうか。ずいぶんひどいね。」

「ところで君も知ってるだろうが明後日僕の結婚式なんだ。どうか来て呉れ給え。」

「ああ、そんなことどこかで聞いたつけねい。行こう。」

「どうか。ではさよならね。」

「さよならね。」そしてカン蛙は又ピチャピチャ林の中を歩き、プイプイ堰を泳いで、おうちに帰ってやつと安心しました。

*

丁度そのころブン蛙はベン蛙のところへやって来たのでした。

「今日は、今日は。」

「はい。やあ、君か。はいれ。」

「カンが来たろう。」

「うん。いまいましいね。」

「全くだ。畜生^{ちくしよう}。何とかひどい目にあわしてやりたいね。」

「僕がうまいこと考えたよ。明日の朝ね、雨がはれたら結婚式の前に一寸散歩しようと云つてあいつを引っぱり出して、あその萱^{かや}の刈跡^{かりあと}をあるくんだよ。僕らも少しは痛いだろうがまあ我慢^{がまん}してさ。するとあいつのゴム靴がめちやめちやになるだろう。」

「うん。それはいいね。しかし僕はまだそれ位じゃ腹が癒^いえないよ。結婚式がすんだらあいつらを引っぱり出して、あの畑の麦をほした杭^くの穴に落してやりたいね。上に何か木の葉でもかぶせて置こう。それは僕がやつて置くよ。面白^{おもしろ}いよ。」

「それもいいね。じゃ、雨がはれたらね。」

「うん。」

「ではさよならね。」

蛙^{かえる}の挨拶^{あいさつ}の「さよならね」ももう鼻について厭^あきて参りました。もう少しです。我慢して下さい。ほんのもう少しですから。

*

次の日のひるすぎ、雨がはれて陽が射しました。ベン蛙とブン蛙とが一いっしょ緒にカン蛙のうちへやって来ました。

「やあ、今日はおめでとう。お招き通りやって来たよ。」

「うん、ありがとう。」

「ところで式まで大分時間があるだろう。少し歩こうか。散歩すると血色がよくなるぜ。」

「そうだ。では行こう。」

「三人で手をつないでこうね。」ブン蛙とベン蛙とが両方からカン蛙の手を取りました。

「どうも雨あがりの空気は、実にうまいね。」

「うん。さっぱりして気持ちがいいね。」三足は萱びきの刈跡にやって参りました。

「ああいい景色だ。ここを通って行こう。」

「おい。ここはよそうよ。もう帰ろうよ。」

「いいや折角せっかく来たんだもの。もう少し行こう。そら歩きたまえ。」二足は両方からぐいぐいカン蛙の手をひっぱって、自分たちも足の痛いのを我慢しながらぐんぐん萱の刈跡をあるきました。

「おい。よそうよ。よして呉れよ。ここは歩けないよ。あぶないよ。帰ろうよ。」

「実にいい景色だねえ。もう少し急いで行こうか。と二足が両方から、まだ破けないカン蛙のゴム靴を見ながら、一緒に云いました。

「おい。よそうよ。冗談じょうだんじゃない。よそう。あ痛つ。あああ、とうとう穴があいちやつた。」

「どうだ。この空気のうちまいこと。」

「おい。帰ろうよ。ひっぱらないで呉れよ。」

「実にいい景色だねえ。」

「放して呉れ。放して呉れ。放せたら。畜生。」

「おや、君は何かに足をかじられたんだね。そんなにもががなくてもいいよ。しっかり押おさえてやるから。」

「放せ、放せ、放せたら、畜生。」

「まだかじってるかい。そいつは大変だ。早く逃にげ給え。走ろう。さあ。そら。」

「痛いよ。放せたら放せ。えい畜生。」

「早く、早く。そら、もう大丈夫だいじょうぶだ。おや。君の靴がぼろぼろだね。どうしたんだろう。」

実際ゴム靴はもうボロボロになって、カン蛙の足からあちこちにちらばって、無くなり
ました。

カン蛙はなんとも言えないうらめしそうな顔をして、口をむにやむにやりました。実
はこれは歯を食いしばるところなのですが、歯がないのですからむにやむにややるより仕
方ないのです。二足はやつと手をはなして、しきりに両方からお世辞を云いました。

「君、あんまり力を落さない方がいいよ。靴なんかもうあつたつてないつたつて、お嫁さ
んは来るんだから。」

「もう時間だろう。帰ろう。帰って待つてようか。ね。君。」

カン蛙はふさぎこみながらしぶしぶあるき出しました。

*

三足がカン蛙のおうちに着いてから、しばらくたつて、ずうつと向うから、^{ふき}露の葉をか
ざしたりがまの穂^ほを立てたりしてお嫁さんの行列がやって参りました。

だんだん近くなりますと、お父さんにあたるが^{ろう}ん郎がえるが、

「こりや、むすめ、むこどのはあの三人の中のどれじゃ。」とルラ蛙をふりかえつてたずねました。

ルラ蛙は、小さな目をパチパチさせました。というわけは、はじめカン蛙を見たときは、実はゴム靴のほかにはなんにも気を付けませんでしたので、三足ともはだしでぞろりとならんでいるのでは実際どうも困ってしまいました。そこで仕方なく、

「もつと向うへ行かないと、よくわからないわ。」と云いました。

「そうですとも。間違まちがつては大へんです。よくおちついて。」と仲人なこうどのかえるもうしろで云いました。

ところがもつと近くによりますと、尚なおさら更わからなくなりました。三足とも口が大きくて、うすぐろくて、眼めの出た工合ぐあいも実によく似ているのです。これはいよいよどうも困ってしまいました。ところが、そのうちに、一番右はじに居たカン蛙がパクツと口をあけて、一足前に出ておじぎをしました。そこでルラ蛙もやつと安心して、

「あの方よ。」と云いました。さてそれから式がはじまりました。その式の盛せいだい大なこと酒もりの立派なこととても書くのも大へんです。

とにかく式がすんで、向うの方はみな引きあげて行きました。そのとき丁度雲のみねが

一番かがやいて居おりました。

「さあ新婚旅行だ。」とベン蛙がいました。

「僕たちはじきそこまで見送ろう。」ブン蛙が云いました。

カン蛙も仕方なく、ルラ蛙もつれて、新婚旅行に出かけました。そしてたちまちあの木の葉をかぶせた杭あとに來たのです。ブン蛙とベン蛙が、

「ああ、ここはみちが悪い。おむこさん。手を引いてあげよう。」と云いながら、カン蛙が急いでちぢめる間もなく、両方から手をとって、自分たちは穴の両側を歩きながら無理にカン蛙を穴の上にひっぱり出しました。するとカン蛙の載のった木の葉がガサリと鳴り、カン蛙はふらふらつと一寸ばかりのめり込こみました。ブン蛙とベン蛙がくると外の方を向いて逃げようとしたましたが、カン蛙がピタリと両方共とりついてしまいましたので二足のふんばった足がぶるぶるつとけいれんし、そのつぎにはとうとう「ポトン、バチャン。」三足とも、杭穴の底の泥どろ水みずの中に陥おちてしまいました。上を見ると、まるで小さな円い空が見えるだけ、かがやく雲の峯みねは一寸のぞいて居りますが、蛙たちはもういくらもがいてもとりつくものありませんでした。

そこでルラ蛙はもう昔むかし習なった六百米メートルの奥おくの手を出して一目散にお父さんのところへ走っ

て行きました。するとお父さんたちはお酒に酔よっていてみんなぐうぐう睡ねむっていていくら起しても起きませんでした。そこでルラ蛙はまたものところへ走ってきてまわりをぐるぐるぐるぐるまわって泣きました。

そのうちだんだん夜になりました。

パチャパチャパチャパチャ。

ルラ蛙はまたお父さんのところへ行きました。

いくら起しても起きませんでした。

夜があけました。

パチャパチャパチャパチャ。

ルラ蛙はまたお父さんのところへ行きました。

いくら起しても起きませんでした。

日が暮くれました。雲のみねの頭。

パチャパチャパチャパチャ。

ルラ蛙はまたお父さんのところへ行きました。

いくら起しても起きませんでした。

夜が明けました。

パチャパチャパチャパチャ。

雲のみね。ペネタ形。

ちようどこのときお父さんの蛙はやつと眼がさめてルラ蛙がどうなったか見ようと思つて出掛^{でか}けて来ました。

するとそこにはルラ蛙がつかれてまつ青になつて腕^{うで}を胸に組んで座^{すわ}つたまま睡^すつていました。

「おいどうしたのか。おい。」

「あらお父さん、三人この中へおつこっているわ。もう死んだかもしれないわ」

お父さんの蛙は落ちないように気をつけながら耳を穴の口へつけて音をききましたら、かすかにぴちやという音がしました。

「占^しめた」と叫んでお父さんは急いで帰つて仲間の蛙をみんなつれて来ました。そして林の中からひかげのかつらをとつて来てそれを穴の中につるして、とうとう一ぴきずつ穴からひきあげました。

三足とももう白い腹を上へ向けて眼はつぶつて口も堅^{かた}くしめて半分死んでいました。

みんなでごまぎいの毛をとって来てこすってやったりいろいろしてやつと助けました。
そこでカン蛙ははじめてルラ蛙といっしょになりほかの蛙も大へんそれから心は改め
てみんなよく働くようになりました。

青空文庫情報

底本：「新編風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

1989（平成元）年6月10日2刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年11月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蛙のゴム靴

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>